

ボン教の典籍

三 宅 伸 一 郎

はじめに

みなさんこんにちは。今年度仏教学科の主任を務めております三宅伸一郎です。この大谷大学には、皆さんが所属している仏教学科を中核とした大谷大学仏教学会という学会が組織されています。仏教学の研究を推進し、その成果発表の場を提供するということを目的として設置されている学会です。この目的を達成するために、毎年、公開講演会や研究発表例会、史跡踏査などの研究旅行、そして『仏教学セミナー』という学術誌の発行を行っています。会が発足したのはいつなのか、私にははっきりわかりませんが、この学会が編集発行を行っていた『仏教学会会報』という雑誌の一九四九年に刊行された創刊号の記事の中に「遂に五月廿九日、数十名の会員を擁して法然上人由緒深きと云はれる安養寺にて産声をあげた」とありますから、一九四九年に発足したものと思われれます。今からもう半世紀以上前のことです。『仏教学会会報』という雑誌は、その後数号しか刊行されなかったようですが、その後雑誌である『仏教学セミナー』は、一九六五年に創刊され、現在、一一三号を数えています。こうした長い伝統を誇る大谷大学の仏教学会ですが、実にその伝統を支えているのは皆さんなのです。皆さんはこの仏教学科に入学されたと同時に、この仏教学会の会員となっております。コロナ禍の現今、各種行事の開催が思うようにできていませんが、皆さんに

は、これから卒業されるまでの間、会の運営を大いに支えていただければと思っております。

さて、今日は、その仏教学会の新入会員歓迎講演会ということです。学科運営の責任者である学科主任が、同時に学会の会長として、皆様を歓迎する講演を行うのが通例となっております、今回、この場で私が講師の役を務めることとなりました。

今日の講題は「ボン教の典籍」です。「仏教学」の学会の講演会なのになんで「仏教じゃないんだ」という声が聞こえて来そうですが、話を先取りして言いますと、実は今日の講演の主題となっているこの「ボン教」という宗教、その宗教の信者たちは、自らの信仰を「仏陀の教え」、つまり「仏教」と考えているのです。詳しいことは後に述べることとして、この「ボン教」という宗教は「仏教」と全く無関係のものではないことを、まず認識しておいていただければと思います。

チベットの地理的位置

では、この「ボン教」はどこ、どの地域の宗教でしょうか。この宗教は、チベットという地域の宗教です。チベットというのがどこにあるのか、わからない人も多いかと思しますので説明します。高校の世界地理などで使われていた地図帳、特に、標高を色分けで示した地図を広げてみてください。こうした地図では、緑色が標高の低いところ、茶色が標高の高いところを示しています。アジアのインドの北にヒマラヤ山脈が連なっています、世界最高峰のチョモランマ (Jo mo glang ma) をはじめとする八〇〇〇メートル級の山が連なり、「世界の屋根」とも呼ばれるこの山脈は、標高を色分けで示した地図では濃い焦げ茶色で示されています。そのヒマラヤ山脈の北側に、茶色く塗られた地域——標高が二〇〇〇〜二五〇〇メートルを超える地域——が広がっているのを見ることができるところでしょう。そこがチベット、つまり、チベット語を母語とするチベット人たちが住んでいる場所です。このチベットという地域は、

現代史の過程の中で、現在、中国、すなわち中華人民共和国のなかに組み込まれています。その中国の行政区分で見れば、よく「チベットとはチベット（西藏）自治区のこと」と説明されることもあります。確かに、省や自治区という最上層の行政区画で「チベット」という名前が付いているのは、このチベット自治区だけです。しかし、その周辺にある青海省・四川省・甘肃省・雲南省の中にある、より下位の行政区画である「州」や「県」を見ていくと、例えば甘肃省であれば「甘南チベット（藏）族自治州」「天祝チベット（藏）族自治县」というように、チベットの名前が付いている（チベット族≡チベット人が居住している）地を見出すことができます。そうした地区もチベットの範囲に含まれます。つまり、中国の行政区分で見れば、チベット自治区や青海省、四川省の北部・西部、甘肃省・雲南省の一部がチベットに相当します。それらの面積を合計すると約二二五八〇〇〇平方キロメートルという非常に広大な土地になります。

標高が高いということもあり、チベットと言えば、荒涼とした土地という印象が強いのではないかと思います。確かに標高が比較的高い場所では、氷河が見られますし、木がほとんど生えていない草原が広がっている場所があります。その一方で、森林が広がる場所もあります。非常に広大な土地ですので、このように氷河から森林まで、多様な環境を見ることができません。ただ、全体としては非常に乾燥した土地ということになります。草原で牧畜しているというイメージが強いかもかもしれませんが、一方で、農民の人たちがいます。

チベットの仏教

今日のテーマであるボン教という宗教は、このチベットの宗教です。チベットの宗教というところの人は仏教を思い浮かべるでしょう。たしかに仏教は、チベットにおいて多数派です。ところが、この仏教は、チベットにとって外来の宗教です。

チベットに仏教は七世紀ごろに中国、そしてインド・ネパールから伝来しました。チベット人は仏教を受け入れる際、仏教の経や論書を自分たちの言語であるチベット語に翻訳しました。国家事業として本格的に仏典の翻訳が進められたのは、チベット人たちが中国の唐から「吐蕃」と呼ばれる中央アジアを席卷する強大な軍事帝国を築いていた時代です。八一四年には『翻訳名義大集』という、サンスクリット語・チベット語対照仏教用語辞典が作られ、そこに収録された訳語を用いて仏典の翻訳を行うようにと定められました。つまり、訳語が統一されたのです。九世紀の前半には概ね九六〇点の仏典が翻訳されていたことが、『デンカルマ (*Dan kar ma*)』とか『パンタンマ (*Phang thang ma*)』と称せられる現存する当時の翻訳仏典の目録からわかります。当時翻訳されたものの多くは大乗の「経」でした。八四二年に吐蕃が崩壊し、国家事業であった仏典翻訳は一時中断しましたが、十世紀中頃から再開され、現在、約四五〇〇点のチベット語訳仏典が、「カンギユル (*bka' gyur*: 仏説部)」「テンギユル (*bstan' gyur*: 論疏部)」の二つに区分・集成され、今に伝わっています。いわゆる「チベット大蔵経」です。この約四五〇〇点の大部分を占めるのは密教のものです。特にインドで八世紀以降に登場し、日本には伝わっていない「無上瑜伽タントラ」というタイプの教えのものが存在することが注目されます。

チベット語訳の仏典の価値は、先ほど述べた通り訳語の統一が行われたこともあって、インドの古典語サンスクリット語で書かれた失われた原典を復元できるほど原典に忠実かつ正確な翻訳である点だとされています。ですから、原典が失われた仏典(チベット語訳しか伝わっていないものもあります)を研究する際にはもちろんのこと、原典が存在する場合でも、これを正確に解読するための資料として、チベット語訳の仏典は必要不可欠なものとされています。

チベットの仏教では十一世紀中頃以降、宗派が成立します。各宗派の祖師たちは、翻訳仏典に基づき、そこに記された思想を解釈し伝えて行くために数多くの著作を生み出しました。そして、祖師に続く歴代の師資たちも、祖師の教えを継承して行くために、場合によっては他宗派を論難するために、著作を行いました。こうしてチベットでは無

数の文献が産み出されました。宗派の祖師や歴代の師資たちの著作の多くはそれぞれの「スンプム (gsung 'bum, 十万語)」つまり「全集」として伝えられています。例えば、チベットの都ラサにあるポタラ宮に所蔵されている「ゲルク派」という宗派の師資たちの全集の目録 (*Pa la lar bzhangs pa i dge lugs gsung 'bum gyi dkar chag*、布達拉宮典籍目録、西藏人民出版社、一九九〇年) には、二百人以上の師資たちの全集が記載されています。そこに収録されている著作の数は数えきれません。目録だけでも九六〇ページ以上ありますから、その数がどれほど膨大なものか、想像がつくでしょう。

大谷大学の図書館にはそうしたチベット語の文献が数多く所蔵されています。その中には、今日のテーマであるボン教の文献も含まれています。これらを読み解いていけるように、チベット語の授業も開講されています。図書館に所蔵されているチベット語の文献は、皆さんの利用を待っています。ぜひチベット語を学び、これに挑戦してほしいと思います。

ボン教とは？

仏教がチベットにとって外来の宗教であるのに対し、ボン教は、チベット土着の、仏教伝来以前の信仰を基盤とした宗教です。

チベット語で「ボンポ (bon po)」すなわちボン教徒 (ボン教信者) といった場合、例えば「あなたはボン教徒か？」などと尋ねた場合、そこで言われるボン教というのは、簡単にいえば、ボン教の寺院に参拝に行き、そこで修行する僧侶たちにお布施をしたり、ボン教の師から教えを受けたり、この宗教の開祖とされるシェンラプ・ミボ (gShen rab mi bo) をはじめとするボン教の神がみを礼拝したりする人々のことを指します。もう少し専門的な言い方をすれば、「①仏、②ボン、③ユンドウン・セムバ (出菩薩) の集団」の3つに帰依する (頼みとする) / 自己の心身を投げ出して信奉する) 人、あるいは「苦・集・滅・道の4つの真理」、すなわち「四諦」を認める人がボン教徒という

ことになります。ここで、「おやつ」と思われる人もいます。「仏教じゃないのに、仏教の授業で聞いたことがある言葉を使っているぞ」と感じる人もいます。

ここで、開祖シェンラプ・ミボの生涯を描いた『無垢栄光経 (*Dri med gzi bryid*)』というボン教経典の一節を紹介しましょう。この経典は十二巻からなる長大なものです。その一部、特にボン教の「九乗」という教義体系に関する部分については、ボン教自身の文献に基づく本格的な研究の画期をなしたデイヴィッド・スネルグロブ (David L. Snellgrove 一九二〇～二〇一六) による研究の中で、英訳がなされています。この英訳も参考にしながら、以下に和訳を原文とともに示します。

無理解・無明・無証悟により

占い・息災儀礼・診断を求め

嘆き苦しみ涙を流す。

苦と煩惱を取り除くため

彼らに対し勝利者は悲心から

病に対しては診断、魔に対しては息災儀礼と

必要なものを全て順番に

いかなる調伏対象にも対応する最高の方便を示した。

無明の中にいる者には智慧を示し

証悟を得ていない者には理解すべきところを説示する。

符号と方便によって真実を示し

有情の煩惱は自然に鎮まる。

世俗の有相は事物として真実である。

ユンドウン・ボンを心から喜び

司祭 (gshen po) の言葉を重んじ

白き善行に対する喜びを起こし

示されたボンに対する献身的な

信仰がさらに増し

司祭の解釈を聞くことにより

後々も厳格な御教えは強固になる。

それ故に神に供物を捧げ

黒き悪魔にルー (glud) を与える。

これらは教えに入る方便の一つである。

ma go ma rig ma rtogs pas //

mo gto dpyad kyis phan par 'dod //

smre zhing sdug bsngal mchi ma 'byung //

sdug bsngal nyon mongs sbyong ba las //

de la rgyal bai thugs rje yis //

nad la dpyad dang bgegs la gto //

gang la gang dgos rim pa yi //
 gang 'dul der ston thabs mchog bstan //
 ma rig pa la rig pa bstan //
 ma rtogs pa la go bas bkrol //
 brda dang thabs kyis don bstan pa //
 sems can nyon mongs rang sar zhi //
 kun rdzob mtshan bcas dngos por bden //
 gyung drung bon la yid kha brod //
 gshen po'i tshig' la gnyan par brtsi //
 dkar po'i dge la spro ba bskyed //
 bstan pa'i bon la mos pa yi //
 dad pa gong du 'phel ba dang //
 gshen po'i smrang la gnyan pa yis //
 phyis kyang bka' gnyan btsan par 'gyur //
 de'i phyir lha la yon phul cing //
 nag po bdud la glud g'tong ba //

'jug sgo thabs ky'i yan lag yin // (David L. Snellgrove ed. and tr., *The Nine Ways of Bon: Excerpts from gZi bryid*. Lon-
 don: Oxford University Press, 1967, pp. 80-83)

この一節は、シエンラブ・ミボがナンシエン・ツクプー (Nang shen gtsug phud) という弟子に説いた言葉なのですが、ここには、「無明」や「悟」、「煩惱」「悲」「方便」「有情」といった仏教用語、さらには仏陀を意味する「勝利者」という言葉が見られます。一方で「身の代」を意味する「ルー」という聞き慣れない言葉も登場しています。これはどうしたことなのでしょうか。

先ほど少し触れたように、九世紀の中頃まで、チベットは、「吐蕃」と呼ばれる中央アジアを席卷する強大な軍事国家でした。七八六年にはシルクロードの要衝であるオアシス都市・敦煌を占領し、その後六十年ほどの間、ここを支配しました。二十世紀初頭に、その敦煌にある石窟の中からたくさんの古文書が発見されました。「敦煌文献」とか「敦煌文書」と言われるものです。その多くは漢語の仏教経典を書写したものでしたが、チベット語で書かれた文献・文書も数多く発見されました。なぜここに、たくさんチベット語のものがあつたのかというと、吐蕃すなわちチベットが長期にわたりここを支配していたからです。この敦煌で発見されたチベット語文献は、まさに当時（すなわち九世紀中頃までの吐蕃王国時代）作られ、その後、十一世紀はじめに石窟の中に封印されてから誰にも手を加えられることなく残された第一級の資料です。その中に、「ボン」と呼ばれる宗教が、当時すでに存在していたことを裏付けるものを見出すことができます（ただし、研究者の中には、当時「ボン」という宗教が存在しなかったと考える人もいます）。仏教がチベットに伝来した時期であるということもあつて、仏教の側からボン教を批判する、あるいは、ボン教の教えを仏教の教えに変えていこうという姿勢から著されたものです。それらによるとボン教は、生贄を伴った葬儀を行っていたようです。

時代が下がって、十二世紀のチベット仏教デイクン・カギュー派の開祖ジクテンゴンポ (Bri gung jig ten ngon po, 一一四三～一二〇〇) の言葉に、その甥で弟子でもあるシェーラブ・ジュンネー (Shes rab byung nas, 一一八七～一二四二) が註釈を施した『一意趣書』という文献には、ボン教が三段階を経て発展したと書かれています。御牧克己氏が

その部分の訳注を發表しています（御牧克己『トゥカン『一切宗義』「ボン教の章」西藏仏教宗義研究一〇、東洋文庫、二〇一四年、五六―七三頁）。これに基づき、『一意趣書』の説くボン教発展の様子を整理すると、次の表のようになります。

段階		時代	内容
1	自然生のボン	ティデツェンポ (Khri Ide brtsan po) ～ティクムツェンポ (Gri gum brtsan po) 王の時代 (神話時代)	シェンラブ・ミポによる教え。鬼神を制御し、祖霊神を祭り、家のカマドをお祓するための祭式や供養の儀式。「原因のボン」と呼ばれるも ⁵ 。
2	逸脱のボン	ディクムツェンポ王の時代	カシミール、ギルギット、シャンシユン（西チベット）から招かれた三人のボン教徒によるもの。瀉血による治療や、空中飛行、鳥の羽で鉄を切るなどの神通力、占い（紐占い、肩甲骨占い）、葬儀の方法など。外道であるシヴァ派の影響を受け、世界卵生説、運命の神 (phywa) やシヴァ神による世界の創始など逸脱した教えを唱える。
3	3 最終的改変	11世紀初頭	青い袴のパンデイタによる仏教の教えのボンへの改変。 仏教・ボン教の間の論争・呪術比べの結果、ボン教が敗北した後、王より処罰を受け怒った仏教徒ギェルピー・チャンジユブ (rGyal bai byang chub) と結託して仏教用語をボン教のものに改変。その後、改変を行なった者たちは王命により斬首され、これに恐れをなしたボン教徒たちは、改変したものを埋蔵経として隠す。
3	2 中間的改変	?	
3	1 初時の改変	ティソンデツェン (Khai strong Ide brtsan、七四二～七九七) 王の時代	シエンゲル・ルガ (gShen sguur glu dga') = シエンチエン・ルガ (gShen chen glu dga'、九九六～一〇三五) が仏教経典をボン教経典に改変し、埋蔵されていたものを発見したと称する。

この『一意趣書』の記述に基づくならば、本来、祭式や供養の儀式、占いや葬儀など、仏教伝来以前の土着の要素を主体とする宗教であったものが、本格的に仏教が導入されて以降、仏教用語を借用・改変し、仏教経典を真似て、換言すれば仏教の影響を強く受けて教義を整えていったのがボン教だということになります。『一意趣書』の説く、このボン教の発展の構図は、概ね認めることができるように思います。ボン教の経典に仏教用語が使われているのは、仏教の影響を受け、用語を借用し、教義を改変していった跡と言えるでしょう。

このようなことから、研究者の中には、ボン教のことを「剽窃の宗教」という人もいます。組織の上で言えば、仏教と同じように出家者があり、寺院・僧院や僧伽が存在します。出家者の着る衣も、仏教のそれとそんなに違いがありません。崇拜される尊像の姿も、特別な知識がなければ、仏教のそれと見分けがつかみません（ボン教徒でなければ分からない）。教義の面では、例えば『無垢栄光経』の出家と苦行の必要性を述べた箇所には

三種の苦行の階梯に入れば

輪廻を脱し、安楽という結果が生ず。

外の戒と内の律を結びつけ

苦行を達成し意義あるものとする。

さすれば罪は清められ、二資糧が完全なものとなり

仏位を速やかに得る。

dkai' thub rnam gsum rin pa srang du gzhus /

'khor ba las thar bde bai 'bras bu bskyed //

phyi yi tshul dang nang khirims zung du sbrel //

dkai ba mthar phyin dkai thub don ldan bya //

des na sgrub sbyang tshogs gnyis rab rdzogs nas //

rdzogs pai sangs rgyas go phang myur thob 'gyur // (『無垢栄光経』vol. a. ボン教カンギユル 第二五巻、四二〇頁)

とあります。戒律の遵守や苦行の実践によって仏位が得られるとありますから、ボン教の目標が、仏教と同じように解脱や成仏にあることがわかるでしょう。確かにこれほど類似しているのですから「剽窃の宗教」と言われても仕方ないかも知れません。しかし私には、これが不当な評価のように思えます。もう一度、先ほど引用した一節を見てください。そこには仏教用語とともに、「ルー」という聞き慣れない言葉がありました。これは何でしょうか。チベット人たちは、人にはそれぞれ生命を司る「ラ (ba)」というものが存在すると考えています。そして、この「ラ」が悪魔などに奪われることにより、その「ラ」の持ち主である人は病気になるったり、不幸に陥つたりすると考えています。ですから、「ラ」が奪われたことにより病気になるったり不幸になったりした場合、回復のためには、奪われた「ラ」を取り戻す儀式を行う必要があります。その際に用いられるのが「ルー」です。主にチベット人の主食であるツァンパ(はだか麦を炒めて粉にしたもの。「はったいこ」に近い)を捏ねて人形を作ります。この人形を奪われた「ラ」の代償として差し出して、その代わりに「ラ」を返してもらおうと言うわけです。こうした「ラ」や「ルー」の考えは、仏教のものではありません。仏教伝来以前のチベット土着の信仰の要素です。

もう一度『無垢栄光経』の一節を見てみましょう。そこには、『一意趣書』の中で仏教の影響を受けた改変以前のボン教の内容として示されている「占い」や「息災儀礼」が、開祖シェンラブ・ミボの教えとして示されています。先にも述べた通り、『無垢栄光経』には「九乗」と言う教えを九つのレベルに区分した教義体系が示されています。

この教義体系のうち下位区分には、「占い」や「息災儀式」、「ルー」を用いた儀式などが位置付けられています。そして、上位区分には、成仏という結果に直接つながる教え、換言すれば仏教の教えを借りた、あるいは影響のもとに形成された教えが位置付けられています。このように、土着の信仰要素をしっかりと教義体系の中に位置付けているところに、ボン教の特徴があります。そして、これらの教えを説いた開祖シエンラブ・ミボは仏陀とされています（ボン教の立場から言えば、釈尊はこのシエンラブ・ミボがインドの人々に本当のダルマを教えるためにつかわされた人とされています）。その意味でボン教徒たちは、自分たちの教えは仏陀の教え、すなわち「仏教」と考えています。いわばボン教は、仏教からの影響を大いに受け入れつつも、チベット土着の信仰の要素をしっかりと残している宗教なのです。

カンギユルとカテン

ではいよいよ本題の、ボン教の典籍について述べていきたいと思います。ボン教の典籍・文献は、①主に僧院で受け継がれてきたものと、②民間で受け継がれてきたものの二種類に区分することができます。

まず、①の、主に僧院で受け継がれてきたものは、「カンギユル」と「カテン (Dka' Htan)」という二つの集成によって構成されています。このうち「カンギユル」は、開祖シエンラブ・ミボの「御教え (カ、Dka)」でチベット語に「翻訳 (ギユル、gyur)」されたものの集成で、冒頭に紹介した仏教のチベット大蔵経カンギユルに相当するものです。ボン教徒自身の説くところによれば、シエンラブ・ミボは、今から約一八〇三〇年ないし一二四五〇年前に、オルモルンリン (Ol mo lung ring) という場所で生まれた人物とされています。この場所は、現在のアフガニスタンやパキスタン、イランなどチベットの西にある地域を指す「タジク (Tag sang)」にあつたとする説があれば、西チベットの「シャンシユン (Zhang zhung)」という地域にあつたとする説があります。ともかくシエンラブ・ミボは、教えをチベット語で説かなかつた、それが後にチベット語に翻訳されたのだとされています。ですからボン教のカンギユル

に収録されている典籍の冒頭には、「タジク語で」「シャンシユン語で」というように、原語によるその典籍の題名が示され、次いで「チベット語では」と、チベット語による題名が示されています。これは、仏教のカンギユル・テンギユルに収録されている翻訳仏典の冒頭と同じ形式で、テキストの真正さを示す目的のためのものです。

もう一つの集成「カテン」とは何でしょうか。ボン教のカンギユルが仏教のカンギユルに相当するのであれば、カテンはテンギユルに相当するものと思うかも知れません。カテンとは「御教え(カ)」に「依る(テン)」ものという意味で、御教えにのっとって著わされた論書を集成したものです。ですので、仏教のテンギユルに相当するものと言って良いかも知れません。ただし大きな違いは、翻訳されたものであるかどうかという点です。すなわち、テンギユルに収録されているものが、インドの論師たちによる著作の翻訳であるのに対し、カテンに収録されているものは、チベット人による著作なのです。初めからチベット語で書かれているので、翻訳の必要はなかったのです。ですからカテンに対して、テンギユルのように「ギユル(翻訳)」という言葉を用いて呼称することはありません。

では、カンギユルやカテンは、いつ頃、このような形で集成されるようになったのでしょうか。仏教の方は、冒頭に述べたように九世紀の前半から訳経目録が作成され、また、カンギユルに関しては、例えば木版本について言えば、十五世紀に刊行されたものをはじめ数種のものがある形で残っているので、その編纂の経緯がかなりの程度解明されています。一方のボン教のカンギユルとカテンについては、完全な形で残っているものがほとんどなく、また目録に関しても現存するものが少なく、しかもそのうち最古のものが、東チベットのギャロン (Gyal rong) 地方におけるカンギユルの木版刊行事業で指導的役割を果たしたクンドル・タクパ (Kun grol tshags pa 一七〇〇?) によるカンギユルの目録——十八世紀という比較的新しい時代のもの——ということもあり、編纂の経緯を詳しく知ることは困難です。ただ、カンギユルの成立時期について言えば、そこに収録されている經典のうち最も新しい『ケルサン経

(*bskal bzang mdo*)』の成立年代が一つの指標になります。口伝で伝えられて来たこの經典は、トニエン・ギエンツェ

ン (Khro gnyen rgyal mshan) に伝えられ、一三八五年に文字に書き表されたとされています。それゆえ、カンギュルの編纂は、少なくとも一三八五年以降のことになります。ここに、十五世紀のチベット仏教ゲルク派の学僧チエンガ＝ロドー・ギエルツェン (S'pyan snga Blo gros rgyal mshan, 一四〇二―一四七二) の著作『ニンマとボンの体系 (rnying ma dang bon gvi nam bzhi)』に見られる「[ボン教には] 仏教のカンギユル全体の代わりになるものがある」との記述を考え合わせると、ボン教のカンギユルは十四世紀の末から十五世紀にかけて成立したと推測することができ、ます。そしてそれは、しばらくの間、写本の形で伝えられてきたと考えられます。

仏教のカンギユルが、早くも一四一〇年に明朝の永楽帝 (一三六〇―一四二四) の命令により初めて木版刊行されたのに対し、ボン教カンギユルの木版刊行は、十八世紀の後半になって、東チベットのギャロン地方 (四川省西北部) で初めて行われました。これは、ボン教史上行われた唯一のカンギユル木版刊行事業となりました。同じく十八世紀にチベット各地で、デルゲ版・チヨネ版・ナルタン版といった仏教のカンギユルの木版本が次々と刊行されたのとは対照的です。その背景には、ボン教が、そうした大事業を達成することのできる経済力を有した政治権力と強く結びつくことがなかったという事情があります。ただ、唯一の例外がギャロン地方でした。この地方は、古くからボン教の力が強く、領主たる複数の王家はボン教を支援していました。王家の一つトキャブ (Khro skyabs) 王家のクンガノルブ (Kun dga nor bu) は、師と仰ぐボン教高僧クンドル・タクパによる指導のもと、まず原本を搜索・収集し、一七七四年までに一一五巻からなる木版を完成させました。実はこの大事業が行われていた時期、彼らギャロン地方のボン教徒たちは清朝による侵攻を受けていました。最終的に彼らは敗北を喫し、一七七八年には、同地方にあるボン教寺院ユンドウン・ラテン (gYung drung lha steng) 寺は、清朝と強い関係を築いていたチベット仏教ゲルク派に改宗されました。こうした苦難の中で、これほど大事業を達成したことは驚愕に値します。トキャブ王家が刊行したこの木版本は、大変貴重なものでした。中央チベットのツァン地方、現在のチベット自治区シガツェ市にメンリ

(sMan ri) 寺というボン教寺院があります。ここは、ボン教の教義学と戒律の中心的な道場です。その僧院長を勤めたニマ・テンジン (Nyi ma bstan 'dzin, 一八二三～一八七五) は、一八四三～一八四六年の間、この木版本を入手するために、二千キロ以上離れたトキヤプ王家の拠点に赴き、これをメンリ寺に持ち帰るといふ旅をしています (Nyi ma bstan 'dzin gyi rnam thar. 尼瑪丹增自伝、民族出版社、二〇二二年、二六五～二九九頁)。道中の教化という目的もあつたでしょうが、これだけの時間をかけても求めるだけの価値がこの木版本カンギュルにはあつたのです。

このカンギュルの印刷は、一九五〇年代中頃まで行われていたようですが、残念ながら版木そのものは、一九六〇年代の後半から十年の間吹き荒れた文化大革命の嵐の中で失われてしまいました。この唯一のボン教カンギュルの木版本の完全なものの現存は、今のところ確認されていません。その一部(数巻)が見つかつていただけです。ただ、こうして残された巻を収集しまとめることで、全巻を復元できるのではないかとの期待を持っています。

では、ボン教のカンギュルは現在存在しないのでしょうか。そうではありません。現在は、十九世紀にチベット北部にいたホル三十九部族の一つカギヤの人々によつて十年余の歳月をかけて作成され、後、サンガクリンパ (gSang sngags dling pa, 一八六四) によつて東チベットのニヤクロン (Nyang rong) にもたらされ、ウエルキュン (dBal khyung) 寺に安置された写本を用い複製印刷したものが流通しています。その複製刊行は三度行われました。すなわち

- ① 一九八五年、アウン・リンポチェ (A gyung rin po che, 一九二二～一九九六) が刊行したもの。
- ② 東北チベットのガパ (rNga pa) にあるトクテン (Togs ldan) 寺のボンロン・ナムカ・テンジン師 (Bon blon Nam mkha' bstan 'dzin, 一九三二～) がアウン・リンポチェ刊行のカンギュルを利用し、数巻を補充したもの。
- ③ モンギェル・ラセー師 (sMon rgyal lha sras, 一九三八～二〇一四) による、一九九八年にウエルキュン寺所蔵写本の完全な影印複製(全一七八巻)。

です。大谷大学図書館は、そのうち③を所蔵しています。目録としては②に対するものが刊行されています (Dan Martin, Per Kræeme, Yasuhiko Nagano eds. *A Catalogue of the Bon Kanjur*. *Bon Studies* 8, Osaka: National Museum of Ethnology, 2003)。これには、③の版との対照表も付されています。最近では、チベット語文献を中心とした仏教文献のアーカイブ化と公開を進めている Buddhist Digital Resource Center が、③のアーカイブ (MW21827) を所収典籍のリストとリンクさせ公開しており、大変便利です。

ボン教のカンギユルは、以下の四つの部から構成されています (各部の名称の後に巻数は、上記③のカンギユルによる)。

- (1) ド (mdo, 経部) 七五卷……………経・律・アビダルマ
- (2) ブム (bum, 十万部) 七〇卷……………般若経
- (3) ギュー (rgyud, タントラ部) / ンガク (sangags, 真言部) 二五卷……………密教
- (4) ゴー (mdzod, 蔵部) / セム (sens, 心部) 八卷……………ゾクチエン

この分類は、十一世紀に成立したと考えられるシエンラブ・ミボの伝記経典『経集 (mdo 'das)』の中に見られる、彼の次の言葉に則ったものとされています。

ああ、ドトウー (mdo stū) シエンラブ・ミボの弟子の一人よ、我入滅の後

経と十万とタントラと蔵の四つに分け

弟子たちよ、ボンの結集をせよ

e ma mdo sdud nga ni mya ngan 'das 'og tu //

mdo 'bum rgyud mdzod bzhir phyas la //

'khor rnamns bon gyi bsdu ba gyis // (『経集』ボン教カンギユル第三〇卷、一五一頁)

先にボン教の特色を説明する際引用した『無垢栄光経』は、「ド(経部)」に収録されています。この「ド(経部)」の中には、ボン教の宇宙論・形而上学を記した『蔵窟 (*mDzod phug*)』という興味深い典籍も収録されています。「ブム (bum, 十万部)」の中には、仏教の『大般若経』に相当する『カムチエン (*Khams chen*, 大界)』など、仏教のものどどのように違うのか、今後検討すべき典籍が数多く収録されています。その一方で、ボン教独自とも言える、精霊などに対する供養法を述べた典籍も数多く収録されています。水の精霊「ル (*ku*)」を鎮める方法を記した經典で、十世紀末より欧米にて研究されはじめ、日本では寺本婉雅 (一八七二―一九四〇) によって一九〇六年にその日本語訳が発表された『十万百龍 (*Klu 'bum dkar po*)』は、この「ブム (十万部)」の中に収録されています。

次に、カテンに話を移しましょう。こちらは、カンギユルのように木版刊行されたことはなく、写本でのみ伝えられて来ました。例えば、ロシアのチベット学者レーリツヒ (G.N. Roerich, 一九〇二―一九六〇) は、一九二八年にチベット探検の途中、チベット北部のナクチュ (*Nag ché*) 地方で、一六〇巻からなる写本を見たとき記録を残しています。このように過去におけるカテンの写本の存在は確認できるのですが、その完全なものも現存は、今のところ確認されていません。ただその内容は、現存する目録によって知ることができます。先ほども触れたメンリ寺の僧院長ニマ・テンジンがカンギユルとカテンの目録を著しています (*bKa' gyur brten 'gyur gyi sde tshan sgrigs ishul bstun pa'i me ro spar ba'i rlung g.yab bon gyi pad mo rgyas byed nyi 'od*)。この目録は、ノルウェーのボン教研究者クヴェルネ (P. Kraemer) 氏が整理・研究を発表しています (Per Kraemer, "The Canon of the Tibetan Bonpos", *Indo-Iranian Journal*, vol. 16, 1974, pp. 18-56).

96-144)。この目録にはカテンとして二九三点の典籍がリストアップされています。その分類は、カンギユルのものとは異なり、

- (1) 外 (phyi) …………… 経・律・アビダルマ
- (2) 内 (nang) …………… 密教
- (3) 秘密 (gsang) …………… ゾクチエン
- (4) 明 (rig gnas) …………… 工芸・言語・医学など一般的な学問

という方法が採用されています。

さて、先ほどカテンの完全なものの現存は確認されていないと述べました。しかし、カテンあるいはボン教のテンギユル (brtan 'gyur) として、いくつかの研究機関に所蔵されているものがあります。大谷大学図書館にも所蔵されています。これは、ソクデ・トゥルクIIテンペー・ニマ (Sog sde sprul sku bsTan pai nri ma) 師により一九九八年に集成・刊行された三〇〇余巻からなるものです。これは、御教え「カ」に属さないボン教典籍で、師が収集したものをまとめたという形のもので、残念なことに、しっかりとした分類がなされていません。ただ、目録はすでに出版されており (Samten G. Karmay, Yasuhiko Nagano eds., *A Catalogue of the New Collection of Bonpo Katen Texts*. Bon Studies 4, Osaka: National Museum of Ethnology, 2001)、典籍を見出すのは簡単です。私の研究は、主にボン教の高僧たちの事績の研究なのですが、ソクデ・トゥルク師の集成したこのカテンには、研究に必要な高僧たちの伝記も数多く収録されています、とても助かりました。

とは言え、ボン教の典籍の中には、カンギユルやこのカテンにも収録されていない数多くの文献があり、近年では

それらが盛んに出版されています。その中でも、私の手元にある二つの叢書を紹介したいと思います。

[1] *Ya thog zhang bod khnyad nor dpe tshogs*: 象雄文集、全五巻、四川出版集団・四川民族出版社、二〇一二年。

[2] *Bon gvi lo rgyus yig tshang chen mo*: 本教歴史文献匯編、全十巻、甘肅文化出版社、二〇一八年。

ともに活字本です。「1」は、教義学、密教、ボン教史、聖者伝・高僧伝、言語(シヤンシユン語に関するもの)・地相占いに関する貴重な典籍が収録されています。特に第一巻に収録されている『見解の次第 (*Ta ba'i rim pa*)』『修習の次第 (*Som pa'i rim pa*)』『道の次第 (*Lam gvi rim pa*)』の三点は、数多くの著作をなしボン教教義学の発展に大きな足跡を残したメトシエラブ・オーセル (*Me ston Shes rab 'od zer*: 一一八〇―一九二〇) によるこれまで知られていなかった典籍で、ボン教思想史や彼の思想の変化を解明する上で重要な典籍であると思われます。各巻の末尾には、その巻で活字化されているテキストのもとになった写本の影印が収録されています。「2」はその名のとおり、ボン教史に関する数多くの典籍を集めたものです。収録されている典籍のテキストは、複数の異本を校勘して作られたものであることが、その序文に明記されています。例えば、第七巻に収録されている十四世紀の学僧テトン・ギェルツェンペル (*Tre ston rGyal mtshan dpal*) による宗義書『ボン門明示 (*Bon sgo gsal byed*)』は、ボン教の教義ばかりでなく、仏教の教義をもまとめた重要な文献です。既に御牧克己氏とサムテン・カルメイ氏によって校訂テキスト (Katsumi Minaki, Samten Karmay eds. *Bon sgo gsal byed (Clarification of the Gates of Bon): a Fourteenth Century Bon po Dorograbhical Treatise*. Kyoto: Graduate School of Letters, Kyoto University, 2007) の一部¹の英訳 (Katsumi Minaki, Samten Karmay, "Nine Vehicles of the Southern Treasury (ho gter gvi theg pa dgu) as Presented in the Bon sgo gsal byed of Tre ston rGyal mtshan dpal, Part One: First Four Vehicles—Annotated Translation", *Memoirs of the Faculty of Letters, Kyoto University*,

No.48, 2009, pp. 33-172. "Nine Vehicles of the Southern Treasury (lho gter gyi theg pa dgu) as Presented in the Bon sgo gsal byed of Tre ston rGyal mtshan dpal. Part Two: Last Five Vehicles — Annotated Translation", *Memoirs of the Faculty of Letters, Kyoto University*, No.49, 2010, pp. 291-495) が発表されています。「2」の第七巻に収録されているテキストは、御牧克己氏とサムテン・カルメイ氏の用いた二つの写本に加え、東北チベット・アムドのティカ (Kha'ka, 貴徳) で発見された写本を校勘のために用いているとされています。ただテキストの異同は、残念ながら注記されていません。

民間に残るボン教文献

東北チベット東端部の民間に、神々を祀る儀軌書や息災儀礼に関する数多くの文献が伝えられており、これらが最近盛んに出版されています。こうした文献を伝えてきたのは、僧院の僧侶ではなく、「レウ (le'u)」と呼ばれる民間のボン教司祭たちです、興味深いのは、こうした民間の儀軌書が数多く残っている地域で活動したボン教高僧キヤントゥルIIナムカ・ギェルツェン (skyang sprul nam mkhai rgyal mtshan, 一七七〇—一八三三) が、こうした儀軌には生贄という殺生につながるものが見られるとして批判する著作 (*Srog glud dmar gtor gcod pa'i gnam gnam legs 'khor lo*) を著している点です。ここに、僧院の宗教としての組織化されたボン教と民間のボン教との間の対立の構図も見取れます。しかし、このような非常に土着の色彩の濃いこうした文献の方に仏教の影響を受ける以前のボン教の姿を見ることができるとはできません。

この民間に伝えられてきた儀軌書の写本を集成した四つの叢書を列挙します。

〈1〉 洛桑靈智多傑 (主編) mDo khams yul gyi bod yig gnai' dpe phyogs bsdus mthong ba mdzum bzhad. 甘肅

青海四川民間古藏文苯教文献、全六十卷、甘肅文化出版社、二〇〇三年。

〈2〉 洲塔、洛桑靈智多傑（主編） *mDo smad mdar' tshang yul gyi gna'i dpe phyogs bsdu mthong pa don ldan*. 甘肅宕昌藏族家藏古藏文苯教文獻、全三十卷、甘肅文化出版社、二〇一一年。（儀礼の様子の動画を収録したDVDが付属）

〈3〉 洛賽、梁吉効、全永康（主編） *'brug chui'i damangs khrod gna'i rabs bon gyi dpe mying phyogs bsgrigs*. 曲民間古藏文苯教文獻、第一輯、全二十五卷、甘肅文化出版社、二〇一八年。

〈4〉 才讓太、阿旺嘉措（主編） *gNa'i rabs bon gyi dpe dkon bris ma*. 古藏文苯教手抄珍本文獻、全十卷、青海民族出版社、二〇一六年。

このうち前者三点は、写本をカラーで影印したものです。こうした形式は研究者にとって、オリジナルを確認することができるといふ点でありがたいのですが、これらの写本は民間に伝えられてきたもので、方言が多用されたり、正書法に則っていない綴りが数多く見られたり、何の予備知識もなく読んでいくには大変な困難を伴います。一方、最後に掲げたものは、写本のカラーの影印とともに、校訂したテキストも掲載していて、非常に読みやすくなっています。

おわりに

今日は「ボン教の典籍」ということで、ボン教という宗教がどんなものか、どんな典籍・文献を有しているのかを、概略お話ししました。ボン教の文献を含め、チベット語の文献は、現地に行かねば入手できないものがまだまだ多いです。今、世界的なコロナ禍の中で、現地への渡航は非常に困難です。一方、インターネットを通じて、こんなものが刊行されたというニュースは即座に伝わってきて、すぐに手にとって見たいのを見ることができないという、ちょ

つとストレスな毎日が続いています。例えば「中華大蔵経」の一つとして全一〇八巻からなるボン教カンギユルが刊行されたということです。「中華大蔵経」としては、仏教のカンギユルとテンギユルが既に刊行されていて、そこでは、各版の間で校勘がなされ、テキストの異同が注記されています。ボン教カンギユルでは、そうした注記がなされているのか、すぐにでも確認したい誘惑にかられています。また、資料を求めて何度も寺院に通ったことや、読めな
いたった一語を解読するために、僧侶や在家密教行者たちと膝を突き合わせ、あれやこれやと考えて過ごしたことが
思い出され、いつあの時期に戻れるだろうかと思う日々が続いています。

以上、非常に雑駁な話となってしまうましたが、今日のこの話を聞いて、ボン教に、あるいはチベット仏教やチベット語に、興味を持っていただければ幸いです。

※本講演の後、私も執筆に加わったボン教の概説書が刊行された。この宗教に関心を持つ者にとって、良い入門書となっていると思われるので、ここに紹介したい。

熊谷誠慈（編著）『ボン教…弱者を生き抜くチベットの知恵』創元社、二〇二二年。

佛教學七三十一

第 114 号

論 文

末法思想の日本への流伝と臨池伽藍…………… 采 翠 晃… 1

新入会員歓迎講演

ボン教の典籍…………… 三 宅 伸一郎…26

書評・紹介

ショバ・ラニ・ダシュ著

『パーリ語文法—仏典の用例に学ぶ』…………… 佐々木 閑…49

* * * * *

学 会 彙 報……………60

* * * * *

論 文

性愛をめぐるシヴァとパールヴァティーの対話

— *Ratīśāstra* 和訳 (1) —…………… 堀 田 和 義…22

キタンパ・イエシエーベル著

「リンチェンサンポ伝」中本の和訳 (一) …………… 井 内 真 帆… I

2021年12月

大谷大學佛教學會

BUDDHIST SEMINAR

CONTENTS

Article

- The Thought of Degenerate Dharma in Japan
and Monasteries on the Garden PondWAKEMI Akira 1

Chairman's Address for New Members of the Buddhist Studies Association

- Bon-po LiteratureMIYAKE Shin'ichiro 26

Book Review

- Dash Shoba Rani, *Pāli Grammar:
Learning from the Pāli Scriptures*SASAKI Shizuka 49

* * * * *

- Reports 60

* * * * *

Articles

- An Annotated Japanese Translation
of the *Ratīśāstra* (1)HOTTA Kazuyoshi 22

- An Annotated Japanese Translation of the medium-length version
of the biography of Rin chen bzang po
by Khyi thang pa Ye shes dpal (1)IUCHI Maho 1

PUBLISHED BY
THE SOCIETY OF BUDDHIST STUDIES
OTANI UNIVERSITY
KYOTO JAPAN